埼玉朝陽運輸㈱　代表取締役

文屋 富士夫

トラック一台を購入して 25 歳で独立した文屋社長は、当時を振り返ってこう話す。
「他人にできる仕事が自分にできないわけがない。やるしかないと思っていた」。
この言葉からは、独立起業に対する社長の自信と、並々ならぬ覚悟が窺える一方、
自身をあえて追い込み、背水の陣で精励する意図があるようにも感じられた。
そして起業後、「頼まれた仕事は断らない」というポリシーのもと信頼と実績を蓄積。
苦労はそれなりにあったが、あまり苦だとは感じずに今日まで邁進してきたという社長。
ここまで事業を継続・発展させてこられたのは、己に枷を課して奮励し続ける強い意志と、
歩む中で増えていった仲間を大事にする姿勢で、前進してきたことにあるのだろう。

「確たる意志と覚悟を胸に歩む中で仲間が増え、その存在を励みに邁進して参りました」

© 2018 KOKUSAI-TSUSHINSHA Co.,Ltd.

「頼まれた仕事は断らない」というポリシーと「人」を大事にした経営で躍進を続ける運送会社

埼玉朝陽運輸 株式会社

【本社営業所】 埼玉県蓮田市黒浜 3677-6
【 事 務 所 】 埼玉県北足立郡伊奈町小室 2278-92
第 2 サンライズ伊奈 207

一般貨物自動車運送事業を手掛ける『埼玉朝陽運輸』。急を要する荷物が多い航空便を数多く引き受けており、細心の注意を払いながら迅速かつ安全に種々の荷物を届けている。本日は、そんな同社をタレントの布川敏和氏が訪問。「頼まれた仕事は断らない」というポリシーに加え、「人」を大事にした経営で事業を推進してきた文屋社長と、ご子息で次長を務める博之氏にお話を伺った。

錦を飾る思いで郷里を発ち 運送業での独立起業を果たす

――はじめに、文屋社長が社会に出て初めて就いたお仕事から伺います。今従事されている運送業だったのでしょうか。

（富） いいえ、飲食業です。宮城の片田舎で育ったことから都会への憧れがあり、錦を飾る思いで 18 歳の時に上京しまして、ラーメン店で働き始めました。そうして働く中で「どうすれば成功し、胸を張って帰郷できるか」という将来のことを考え出し、運送業に転身したのですよ。と言うのも、店にはトラックドライバーの方々がよくいらしており、その人たちの話を聞くうちに商機を感じたのです。そして運送業でアルバイトを始めたところ思いのほか仕事が楽しくてね。自身の進むべき道は運送業だと思い、近距離ドライバーからスタートしました。

――常に高みを目指して歩んでこられたのですね。では、運送業に関わるようになってから独立するまでの経緯をお聞かせ願えますか。

（富） 近距離ドライバーとして働く中、長距離ドライバーだった仲間から「長距離のほうが実入りが良い」と聞きまして、そちらに転向。青森や秋田といった東北に、四国など様々な場所に行きましたね。そうして色々な場所を訪れると共に幅広い経験を積んで、知見を深めていきまして、「他人がしている仕事で自分にできないわけがない」という思いのもと、25 歳の時にトラック一台を購入して独立。個人事業で長く歩んだ後に、法人化して今に至ります。

顧客本位の仕事に徹して信頼を蓄積 築いた社の礎のもとさらなる飛躍を図る

――強い思いを胸に独立起業されましたが順調に歩んでこられましたか。

（富） もちろん苦労はそれなりにありましたが、あまり苦に感じることはなかったですね。やり甲斐のある仕事ですし、努力すればするほど目に見える形で返ってきましたから。また、起業後から幸い仕事はありましたから、「やるしかない」という気持ちで励み、燃料の無駄遣いやタイヤの摩耗などを極力抑えながら堅実に歩んで基盤を整えて参りました。

――お話を伺う中で社長の剛気なお人柄が窺えました。そんな社長はお仕事でどのようなことを意識しておられますか。

（富） 昔からずっと、「頼まれた仕事は断らない」というのがポリシーです。当社では現在、航空便をメインに種々のお荷物を引き受けて運送しておりますが、お客様の中には困っているからこそ当社を頼ってきて下さる方もおられます。その思いをしっかりと汲み取って、細心の注意を払いながら迅速かつ安全にお届けするのが我々の仕事だと私は考えているのです。そして、そうした仕事を続けてきたからこそ、今につながる信頼を得ることができたと思っていまして、このポリシーは当社で次長を務める息子の博之も受け継いでくれています。

――博之さんは元々こちらに？

（博） いえ。以前は製薬会社で研究職に就いていました。そんな私が当社に入ったのは、当社ではタスク処理などにおいてまだアナログな部分がありましたのでデジタルの新風を吹かせたいという思いがあったことや、異業種である私の視点や知見を事業の発展に活かせるのではと思ったためです。父には研究職から離れることを引き留められましたが、当社にチャンスと未来を感じて入社しました。

――頼もしい後継者がいて安泰ですね。ちなみに、法人化されたのは次代を見据えてのことだったのでしょうか。

（富） 息子だけではなく、スタッフや長年私についてきてくれた取締役のためです。と言いますのも、取締役とは 15 年ほど共に歩んでおりまして、私一人だったらここまで事業を発展させられなかったでしょう。取締役の助力があったからこそ今日の当社がありますし、他のスタッフも含めて私についてきてくれる人たちのためにも、しっかりとした会社組織にしなければと思ったのです。

――では最後に、お二人の今後の展望を。

（富） 現在当社には約 40 名のスタッフがいまして、今まで以上に仲間を大事にしながら事業を堅調に推進していければと思っています。そして、あと数年もすれば次長に社を託すつもりです。

（博） ありがたいことに、取引先様から懇意にしていただいており首尾良く歩めていますので、今後も荷主様の信頼を裏切ることのないよう、丁寧で誠実な仕事に徹していくつもりです。また、地域貢献への思いもありまして、この地域のために何かしていきたいですね。社の礎を築いた父への親孝行として努力を重ね、当社をさらに飛躍させていくべく、この先も励んでいきたいと思います！

（取材／ 2018 年 1 月）

代表取締役
文屋 富士夫

次長
文屋 博之

Column

文屋社長と共に、長年にわたって事業の継続・発展に尽力してきた取締役をはじめ、日々励むスタッフたち。そんな自身についてきてくれる人たちのために、しっかりとした会社組織にしなければと社長は法人化に踏み切ったそうだ。このことから人を大事にするという考えが、社長の経営観の基軸になっていることが窺えた。そして、その姿勢が同社の固い結束力を生み出しているに違いない。

「頼まれた仕事は断らない」というポリシーで信頼と実績を蓄積してきた『埼玉朝陽運輸』。社長のご子息で、次長を務める博之氏もそのポリシーを継承しているという。そんな次代を担う若きホープは社長のポリシーや豊かな知見のみならず、その経営観もしっかりと受け継ぎ、堅実に業績を推移させていくことだろう。一致団結して前進し続ける同社の、今後の躍進が楽しみでならない。

布川 敏和

「次長を務めておられる博之さんは元々研究職に就いておられ、同社に転職することを、お父様である文屋社長から引き留められていたそうです。それでも『当社にチャンスと未来を感じて入社しました』と博之さん。社長はそんな思いでご子息が来てくれたことに対し、嬉しさを感じておられるようです。後継者不足で悩む経営者が多い中で、社長には高い意欲と志を持った博之さんがいますし、御社の今後の活躍に期待しています！」

© 2018 KOKUSAI-TSUSHINSHA Co.,Ltd.